

「沈黙の螺旋理論」^{らせん}と世論調査

(社)日本通信販売協会顧問
熊田 登

I 「沈黙の螺旋理論の概要」

1. はじめに

「沈黙の螺旋理論」の提唱者エリザベート・ノエル・ノイマン女史は、西ドイツで最大級の世論調査機関・アレンスバッハ世論調査研究所の設立者であり、またその主宰者として現在に至るまで50年近くの長きにわたって指揮をとっていると同時に、西ドイツ・マインツのゲーデンベルク大学(通称マインツ大学)の新聞研究所で20年あまり教鞭をとっていたこともある社会心理学者である。彼女はまた、1979年度から1980年度にかけて世界世論調査協会の会長もつとめている。

2. 螺旋理論の5つの基本仮説

この理論は、独立した4つの仮説と、それら相互の関係に関する第5の仮説の上に成り立っている。4つの仮説は以下の通りである。

- ① 逸脱者を孤立にさらすことで、社会は、彼または彼女に脅威を与える。
- ② 人は、孤立への恐怖を絶えず感じている。
- ③ 孤立への恐怖により、人は常に意見風土を感知しようとする。
- ④ この感知の結果が、公的な場面での行動——特に意見の表明や沈黙に影響する。

第5の仮説は、これら4つの仮説が関連しあって、世論の形成、維持、変化が起こるといふものである。

この仮説の中には“意見風土”というように耳慣れない言葉も入っているので、誤解を

恐れずもう少し分かりやすく書き直すと、次のようにも言える。

- ① 人は社会的存在として、自分の意見の孤立を恐れる。
- ② 社会を観察し、自分の意見が優勢か否かを判断する。
- ③ 自分の意見が優勢と判断した時には、自分の意見をよく表明する。
劣勢と認識した時は、意見表明を差し控え“沈黙”する。

その結果、少数意見は益々少なくなり、多数意見がどんどん増えて行く。これを“沈黙の螺旋展開”と呼んでいる。

3. 螺旋理論のきっかけ

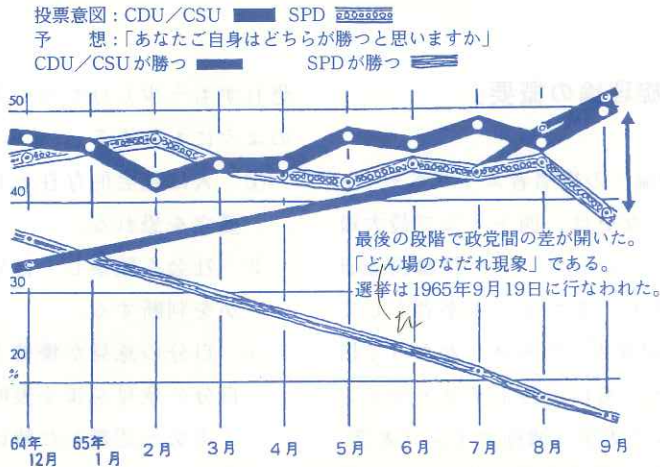
ノイマン女史が、「沈黙の螺旋」現象に気付いたきっかけは、1965年の西ドイツの総選挙であったというから、その時の状況を、図1および図2で見よう。

図1は、1965年の選挙年のなぞをグラフで示したもので、「どたん場のなだれ現象」を示している。

図2は、1965年の「どたん場のなだれ現象」が、1972年にも再び繰り返されたことを示している。(政党の側にとっては、逆の方向ではあったが。)

図1 1965年の選挙年のなぞ

投票意図は何ヶ月も変わらず、CDU/CSUとSPDがデッドヒートを演じていることを示していた。しかしそれと同時に、CDU/CSUが勝つという予想が有権者の間に広がっていった。それはどうしてそうなったのだろうか。ともかく最後に、この予想された勝者の方向への勝ち馬効果が現れたことに注目したい。

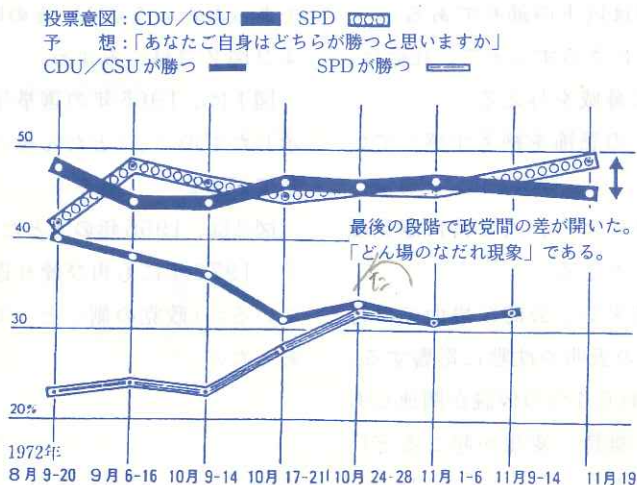


出典 Allensbach Archives, surveys 1095, 1097, 1098, 2000, 2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006

(注) なお、図でCDU/CSUはキリスト教民主同盟を、またはSPDは社会民主党を指す

図2 1965年の現象は1972年にも再び繰り返された

投票意図を尋ねればほとんど一定で、CDU/CSUとSPDはデッドヒートを演じ続けていたが、意見風土が変化し、CDU/CSUが勝つという予想は減少、SPDが勝つという予想が増大した。そしてついに、この増大した予想の方向に再度勝ち馬効果が生じたのである。



出典 Allensbach Archives, surveys 2084, 2085, 2086/I, 2086/II, 2087, /I, 2087/II, 2088

ここで彼女は、「他の大多数の人はどう考えるか？」あるいは、「世論のムードをどう見るか？」ということが、選挙戦終盤における支持の“なだれ現象”に影響するのではないかという仮説を立てた。

即ち、「自分の支持する意見が支配的な意見だ」、あるいは、「支持者が増大中の意見だ」と感じている意見の主張者は、公的な場面でそれを口に出して、周りの人々の支持を得たがるのに対し、少数派だと感じている人々は、公の立場では沈黙を保ちたがるということになる。

こうして、「知覚された多数派の声」が増大する結果、意見の事実上の分布、または「意見の風土」についての印象は、益々支配的な意見、増大中の意見を多く見積もる方向へと歪められることになる。このことが更に多数派の声の増大と少数派の沈黙を促す。

こうして、多数派支持の方向への「沈黙の螺旋」現象が生じ、ついには、支持の「なだれ現象」を引き起こすことになるのである。

この仮説を証明するために、彼女は、過去の事例や世論調査の結果を積み重ね、世論の見えない圧力の存在を明らかにしていった。

その一つとして「孤立への恐怖」という動機を明らかにするため、ソロモン・アッシュ (Asch, S. E.) の実験 (1951, 1952) を引いている。

図3は、アッシュの線分判断実験で、孤立への恐怖からくる同調傾向を示すテストである。

1950年代初頭のアメリカで、社会心理学者のソロモン・アッシュは、ある実験を50回以上も繰り返し行なった。

その実験の被験者に課せられた課題は、図3の右側に見るような三つの線分のどれが左側の基準線と等しいものかを判断させるもので

図3 アッシュの線分判断実験：孤立への恐怖からくる同調傾向のテスト

実験の被験者は次の質問を受ける：「右側の3本の線分のうち、左側の基準線に等しいのはどの線分ですか」



出典 Solomon E. Asch "Group Forces in the Modification and Distortion of Judgments." *Social Psychology*, New York, Prentice - Hall, 1952, p.452.

あった。3本のうち1本は必ず基準線と同じ長さで実験は行なわれたから、一見課題はやさしく見えた。正しい答えは明らかであり、実際全ての被験者が簡単に正答できる課題だった。

1回の実験には8人から10人が参加し、基準線および比較すべき3本の線は被験者全員が見えるところに掲げられ、左側の被験者から順に、基準線と等しい組み合わせはどの線分か、自分の判断を声に出して言うように指示された。この手続きは、1回の実験あたり12回繰り返された。

さて、その最初の2回が終わり、全被験者が同じ線分を正しく答えた後で、突然、状況は変化する。

実は、真の被験者である一人を除けば、他の「被験者」たちは実験のアシスタントだったのである。そして3回目の回答時から、アシスタントたちは、実際には基準線と異なる長さの線分を基準線と等しいと揃って回答したのである。真の被験者は最後に回答するように座らされていたから、彼は自分の感覚と矛盾する全員一致の判断の圧力のもとで回答を

迫られ、そこでどう行動するかが吟味されたのである。

彼は動揺しただろうか。自分自身の判断と、いかに矛盾するものでも、彼は多数意見に賛同したのだろうか。あるいは、しっかりとしてぐらつかなかっただろうか。

何度か実験を繰り返した結果、真の被験者の10人中2人だけが自分自身の感覚に断固として固執する（ハードコア）ことが分かった。

残り8人のうち2人は、10回の判断のうち、1度か2度だけ誤った多数派の判断に同調した。しかし、残りの6人は、より頻繁に同意したのである。

このことは、

「自分の真の利害には関連せず、またその結果がほとんど無害な課題であっても、それが明らかに誤りだと分かっているが、多くの人が多数意見に加わることを示している。」

トックビルの言うように、

「過ちよりも孤立を恐れ、多数派と同じ意見だと公言した。」という現象が、まさに起きているのである。

結論として、アッシュの実験は、自分を信頼する人がいかに稀であるか、孤立への恐怖がいかに強いものであるかを明らかにした。

II 沈黙の螺旋理論に対する感想と意見

1. 世論の定義と世論調査

ノエル・ノイマン女史は、

“世論とは、討論的となっている分野において、皆から受け入れられ承認されることを目的として公に表現される意見又は行動である。”と定義している。

これを一歩進めると、

“世論とは、非常に議論の高まっているような分野において、公に表現でき、しかも孤立してしまうというリスクを伴わない意見およ

び行動”としている。さらにこれを補って、“ここで世論というのは、決して狭い意味での言葉で発言されるもののみを指しているわけではありません。他にも、態度や価値を表わすシンボルは沢山あります。”

といている。（例えば、特定政党支持のリボンやバッジをつけること、車にステッカーを貼ること、あるいは、国の祝日に国旗を掲げるか掲げないかなど、その例は無数にある。）

これは、これまでの世論調査の、“知的で責任感のある市民個人の自由に表明された意見”という世論の概念とは食い違っているし、当然のことながら、“正しい世論調査の結果が世論である”と考える私の意見とも隔たりがある。その証拠に、女史は“沈黙の螺旋は民主主義の理念とは両立しない”と明確に述べている。

沈黙の螺旋理論によれば、国民の意見がだんだん多数派に取れんしてゆくのは、社会を統合し、それを解体から守り、我々を互いに結び合わせるためである。“このため、政府も個人も世論に恐怖感を抱く”という観点は、古典的な民主主義理論からは導出されないものである。

彼女は次のようにも述べている。

“統計的な度数分布が、一体どうやって政府を覆したり、個人に恐れを抱かせたりし得るだろうか？”

“世論研究で知られているような個人の意見の集合は、どのようにして、世論として知られるべき政治的勢力として研究され得るのか？”

これが、従来から考えられていた、そして、我々も当然のこととして受け入れてきた世論および世論調査と、沈黙の螺旋理論における世論との違いである。

2. 螺旋理論における人間観と社会観

沈黙の螺旋理論の骨格となっているのは、観察および実験から得られたリアリスチックな人間観であるが、その基本的な思想は、社会の統一・維持という社会学的な一種の合目的論で貫かれている。これは知的で責任感のある理想的な個人を想定して、個人を基礎とする社会の成立・発展を考える近代民主主義とは基本的に異なるものである。

我々は、この両者のうちどちらをとるべきかを、冷静に検討する必要がある。

螺旋理論は、実験や調査によって人間の弱さを客観的に冷静に捉えている点に、その強さが見られるが、基本的思想として、社会の統一・維持を先天的命題として仮定するところにその弱点も潜んでいるように思われる。

その一つの表われは、彼女が、“人は常に意見風土を感知できる能力（これを準統計的能力と呼んでいる）を備えている”として、その実験的証拠も挙げているが、おもてに表われた世論がデッドヒートを演じ続けているときに（図2参照）、その裏にある意見風土（いわば、おもてに出ない世間の空気）を同一方向に向かうものとして感じる第六感のよう

なものの存在を万人に想定することには、些か無理があるように思われる。

欧米流の近代民主主義は、理想的人間像を仮定するところに、その強さとともに、甘さが存在すると思われる。とくに、我が国における民主主義は戦後アメリカから移植されたのに近いもので、50年以上経った今日でも、いまだに国民に十分なじんんでいるとは考えられない。そのことは、憲法の扱い方一つにも端的に表われていると言えよう。

私自身は、日本人には、本来、民主主義はなじみにくいものと思っている。

ノイマン女史が、自己の理論を、欧米におけるよりも日本において受け入れられ易いかのように考えているのは、日本人の特性をよく見抜いているからではなからうか。

最後に、ノイマン女史が述べている次の言葉を紹介して、結びとしたい。

“今後も、螺旋理論を選挙予測に用いていくことを真剣に検討してゆく必要があると思います。同時に、これを他のセオリーとリンクさせて、選挙以外のいろいろな分野に適用していくことも課題となるでしょう。”

